

水稻品種「ひとめぼれ」の栽培法（追補）
 - 「ひとめぼれ」の栄養診断基準 -

（農試県南分場）

1. 背景とねらい

「ひとめぼれ」は「ササニシキ」に並ぶ良食味品種として、本県中南部の作柄安定化と産米の品質・食味の向上のために、平成2年度に奨励品種に採用された品種である。その栽培法については平成3年度に『水稻品種「ひとめぼれ」の栽培法』として普及に移したところであるが、今回新たに、良品質・良食味・安定生産のための栄養診断基準について、指標となる結果が得られたので、指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

(1) 栄養診断基準

収量540kg/10a（篩目1.9mm）を目標とした栄養診断基準は次のとおりである。なお、従来他の品種では6月下旬の基準を示してきたが、この時期の生育ステージ及び生育量の年次変動が大きいため、最高分けつ期の基準とした。

最高分けつ期は葉数で9.5葉～10.0葉、暦日で6月第6半旬～7月第1半旬に相当する。

項目	最高分けつ期	幼穂形成期	出穂期
稲体乾物重 (g/m ²)	170～200	420～480	850～950
稲体窒素濃度 (%)	2.6～2.9	1.5～1.8	0.9～1.2
窒素吸収量 (g/m ²)	5.0～6.5	6.5～8.0	9.0～11.0

(2) 幼穂形成期における葉色の基準

幼穂形成期の基準稲体窒素濃度に対応する葉色は次のとおりである。

測定法	測定値
SPAD葉緑素計	31～38
カラースケール	4.0～5.0

3. 指導上の留意事項

(1) 最高分けつ期（葉数9.5葉～10.0葉、6月第6半旬～7月第1半旬）の診断基準としたため、他の品種と単純な比較はできないので、利用にあたっては留意すること。

(2) 葉色の測定法は既往の参考事項「水稻の簡易栄養診断－SPAD葉緑素計の適応性

—」(昭和59年)等で示した方法による。

(3) 生育各時期の栄養診断基準は、標準的な栽培法での基準であり、極端な栽培法では適合しないので利用できない。

4. 試験成績概要

表1 各試験年次における最高分けつ期と葉数

年次	最高分けつ期 月/日	葉数
平成2年	6/25前後	9.4~9.8
平成3年	6/25前後	9.4~10.0
平成4年	7/4前後	9.5~9.9

表2 収量構成要素の指標(1.9mm収量、540kg/10a、平成3年度参考事項)

1.7mm 収量標準	穂数 (本/m ²)	一穂粒数 (粒)	m ² 当粒数 (千粒)	玄米千粒重 (g)	登熟歩合 (%)	稈長 (cm)
560	500~	58~	30~	21.0	85	78~
kg/10a	550	65	32	~22.0	以上	81

表3 各品種ごとの栄養診断基準

項目	品種	6月下旬	幼穂形成期	出穂期
稲体乾物重 (g/m ²)	ササニシキ	100~140	340~400	850~950
	あきたこまち	50~80	450~550	750~900
	ひとめぼれ	170~200	420~480	850~950
稲体窒素濃度 (%)	ササニシキ	3.0~3.5	1.5~1.8	1.0~1.2
	あきたこまち	3.2~4.0	1.5~1.8	1.1~1.4
	ひとめぼれ	2.6~2.9	1.5~1.8	0.9~1.2
窒素吸収量 (g/m ²)	ササニシキ	2.5~3.5	5.0~6.0	8.0~9.0
	あきたこまち	1.5~2.5	7.0~9.0	9.0~11.0
	ひとめぼれ	5.0~6.5	6.5~8.0	9.0~11.0

注) 6月下旬の項の「ひとめぼれ」は最高分けつ期

表5 各品種ごとの幼穂形成期における葉色の基準

品種名	基準窒素濃度	カラスケール葉色値	SPAD葉色値
ササニシキ	1.5~1.8	4.5~5.5	29~36
あきたこまち	1.5~1.8	4.7~5.2	36~40
ひとめぼれ	1.5~1.8	4.0~5.0	31~38